

利用者にあわせた生活支援

～帰宅願望を支える支援を通して～

16CC22 氏名 山本 紘子

I. はじめに

特別養護老人ホームは、介護保険法に基づいて介護保険が適用される介護サービスを手掛ける施設であり、基本的に要介護3～5のいずれかの要介護認定を受けている人が対象となる。

今回担当させて頂いた A 様は、多くの利用者様とコミュニケーションを図っている様子があるが、夕方になると帰宅願望がみられ、不安な様子がみられていた。その為、不安や寂しさを軽減する介護計画を実施したので報告する。

II. 実習先種別・実習期間

介護老人福祉施設

2017 年 6 月 26 日～7 月 28 日（うち 23 日間）

III. 事例紹介

A 様 80 歳代 女性

1. 家族構成及び生活歴

A 県 B 市出身。9 人兄弟の 5 女として生まれる。

2. 入所に到った理由

夫が亡くなってから認知症が出始め、H27 年から姉と一緒に〇荘に通うようになった。H28 年 4 月腰痛がひどく布団から起き上がれず這って生活していたことから〇〇の園のショートステイを利用し、入所となった。

3. 健康状態

高次脳機能障害

4. 日常生活の状況

(1) 移動

円背であるが、介助なしで自由に行動できる。

(2) 身支度

上衣、下衣の着脱とも自力で可能。こだわりはなくあるものを着ている。

(3) 食事

主食・副食共に常食であり、義歯を使用している。

食事姿勢は、椅子に座って足底をつけて食べている。

口腔ケアは自分でやっている。

(4) 排泄

尿意・便意あり。

トイレは、共同トイレを利用しており、夜間はポータブルトイレを使用している。

布パンツを使用している。

(5) 入浴・清潔保持

個浴にて週に 2 回入浴を行っており、洗体は、ほぼ自力で行っているが背中と洗髪は職員が行っている。

(6) 睡眠

夜間は熟睡しているが日中、傾眠がみられることがある。

(7) コミュニケーション

短期記憶の低下がみられる。

視力：正常 聴力：左耳が正常で右耳は難聴

5. 性格

明るい性格だが、世話好きのため周りの利用者の手伝いをし過ぎることがある。

6.1 日の過ごし方

6時に起床し、食事は食堂で摂っている。日中は、ほとんど食堂においてあるTVを観て過ごしている。

14時半頃に食堂でおやつ。18時頃に夕食を食べ20時頃には就寝している。

IV. 介護の実際

1. 課題の発見と分析

施設内の行事に参加しているが、ほとんどTVを観て過ごしており日中の活動が少なかったため散歩を実施した。退屈な様子がみられたため余暇時間を充実してもらうために花のくす玉作りを実施した。

2. 介護上の課題

帰宅願望がみられるため不安を軽減し、余暇時間を充実させる必要がある。

3. 介護目標

長期目標：落ち着いた生活を送ることができる。

短期目標：(1) 下肢筋力の低下を防ぐことができ、気分転換や精神的な安定を図ることができる。

(2) 不安を解消できるよう余暇活動に取り組むことができる。

V. 実施及び結果

7月15日15時45分から16時10分までの25分間の時間を設けて散歩を実施した。散歩を実施してみると普段施設内からあまり出ていなかったことから外へ出ると嬉しそうな表情や言動がみられた。散歩の際、A様が「こうやって外へ連れてきてくれて幸せ」と満面の笑みでおっしゃられた。散歩が終わりフロアに戻り少し時間が経つと帰宅願望がみられた。7月11日と7月13日と7月15日の計3日間のA様が何もすることがなく退屈な時間に花のくす玉作りを行った。実物の画像を見せて「これを作りたいので手伝ってくれませんか？」と声をかけると「私じゃおるのが不細工だけどそれでもいいならやってあげるよ」とおっしゃって下さった。折り紙の色を自分で選ばれて「どうやって折るの」と聞かれたので説明しながら一緒に折っていった。1枚折り終わると次の折り紙を手に取り途中まで手順に困ることなく折っていた。折り紙を折っている最中は集中されている様子で帰宅願望はみられなかったが折り紙を折るのを終了すると帰宅願望がみられた。

VI. 考察

下肢筋力の低下を防ぐためにも散歩を行うことができ、それと同時に気分転換を図ることができた。しかし、外からフロアに戻ると認知症の症状である帰宅願望がみられた。不安を解消できるよう余暇活動として花のくす玉作りに取り組むことができその際には不安な様子もなく会話が増えるなど良い雰囲気で行えた。しかし、作業が終わると帰宅願望がみられた。竹内は、¹⁾高齢者ケアの基本は、水分・食事・運動・排便を促すことだと述べている。帰宅願望については日内変動とし日内変動の原因として脱水をあげている。そのため水分ケアをする事で帰宅願望を軽減する必要があると考え水分ケアなどの自立支援を重視した介護計画を実施する必要性について考えられた。今回、短期目標としては、達成ができたが長期目標については達成できたか疑問が残る。落ち着いた生活とは、自分らしくのびのびと生活していけることだと考え帰宅願望を消失する介護ケアについて着目した介護過程が必要であったと考える。

VII. おわりに

今回の実習及びケーススタディを通して疾患を正しく理解し、疾患による生活への影響を適切に把握する必要があることは勿論であるが、利用者様の言動の表面だけを捉えるのではなく、その根底にある背景や思いを捉えることを一人ひとりの利用者様との関わりを通して理解していくことが大切であると学ぶことができた。

参考・引用文献

1) 認知症を治す事例集 1 発行日：2017年12月25日 第1版第1刷発行 著者：竹内孝仁

2) 介護の生理学 発行日：2013年3月20日 第1版第1刷 著者：小平めぐみ 井上善行 野村晴美 藤尾祐子 古川和稔